人間形成のキリスト教的基礎

――ペスタロッチの『隠者の夕暮』をめぐっての一考察――

秋田　稔

まえがき

「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じ人間、その本質から見た人間、そも彼は何であるか。」という言葉をもってはじまるペスタロッチ J.H. Pestalozzi (1746-1827) の『隠者の夕暮』[1]は、彼の残した尨大な文書の中でも最もよく彼の人間教育理念の真意を表わしたものとされている。『隠者の夕暮』は著作者としての彼の処女作であるといってもよいのであるが、[2]それと共に、彼の生涯を通じての思想の根幹はすでにここに集約的に表現され、ここより発していると見ることができよう。ノイホフに於ける失意の末に記されたこの書には、人間的苦悩を経て深化された彼の人間自覚と溢れるばかりの人間愛が、魅力ある人間教育の思想として表出されているのである。この書に於て触れることの出来るものは、ペスタロッチの思想を通しての彼の烈しく燃える人間そのものであるが、しかし、それだけには止まらない。ペスタロッチという一人の人間に深く触れるときに、この一人格の中で問われ、答えられている人間的課題にわれわれはぶつからざるを得ないのである。それは

何か。われわれがここで明らかにしようとするのは、このことである。

人間は、本来自己形成的、他者形成的に人間を形成してゆくという動的な作用を自らに担って居り、その意味で教育的存在であるということが出来る。この人間の教育的性格を最初にわれわれに明示してくれたのは、ギリシャ思潮に於ける「パイディア」の概念であったが、その根柢にはエロス的人間理解があった。[3] キリスト教が、ギリシャ的なものとは全く性格を異にしたヘブライ的人間把握の基盤に立ってギリシャ風世界の只中に登場して来たときに、エロス的人間形成の問題性は露呈され、その崩壊と平行してキリスト教は新しい人間形成の道を打ち出して来る。が、この新しい人間形成の道は、ギリシャ的エロス的人間形成の道を打ち破って自らを打ち樹てるというような方向に於てではなく、むしろ、エロス的人間形成を否定しつつこれをもう一度全く新しい立場から生かすという内部革新の方向をとった。しかしこのような人間形成としての教育のキリスト教的革新がキリスト教教育理念という明確な形をとって取り上げられるということは、歴史上すぐに起って来たのではなかった。福音と文化との深刻な内面的対立の中から、優れた新しい教育の理念が打ち出されて来るのは、はるかに時代の下った近代に於てだったのである。われわれはその顕著な例としてペスタロッチを挙げることが出来よう。このことは決して理由のないことではない。[4] 中世に於ては、いわば中世的形態に於て福音と人間文化とが綜合、融和され、一応両者の間に存すべき解き難い問題は表面化せず、その意味で、人間形成のキリスト教的基礎についてその特異性を明らかにすべき必然性は存しなかった。が、近代になって、この福音と文化の問題が分裂と深刻な対立の中でもう一度根本的に問われはじめる。この問に答えることが近代的人間の一つの課題となるのであ

るが、神中心の福音と人間中心の文化との対決を己が実存に於て担いつつ、その人格の内奥から一つの新しい人間教育の理念を打ち出そうとしたのが、ペスタロッチだったのである。このような、時代の担った課題と取り組む端緒あるいは態勢を、われわれは彼の『隠者の夕暮』に於てみることが出来る。われわれがこの著作を考察の中心にとりあげるのは、この意味に於てなのである。

ペスタロッチは、この課題に関し決定的な解答を示しているわけではない。それは、あくまで近代ヒューマニズムの限界の中での仕事であった。近代ヒューマニズムが福音と文化の問題に究極的な答を出したとはわれわれは考えないが、ペスタロッチの答も、あくまで近代ヒューマニズムの背負った問題性をその底に持っている。この意味で、われわれは、彼の人間教育の理念を近代キリスト教ヒューマニズムのそれであると一応定義しておきたい。それは近代的キリスト教としてのプロテスタンティズムの人間把握の基盤の上になされた仕事である。が、それにも拘らず、ペスタロッチのそれは、近代を越えて現代的課題への一つの大きな示唆と方向とを与えてくれるのである。

近代の人間覚醒は、現象的には中世的なキリスト教人間把握との対決に於てなされる。それ故にこそ、それは先ず、プロテスタンティズムを通しての人間解放であった。人間解放とは、人間が人間となること、あるいは人間が人間であることである。人間といわれる以上、人間は本来的に人間である筈であるが、事実はそうでない。従って、人間は互に人間を追求し、自己を形成してゆくように仕向けられる必要がある。かくて、人間覚醒は人間教育の覚醒に他ならない。近代は人間の時代であるといわれるが、それは人間教育の時代なのである。

人間教育が問題とされればされるだけ、その根拠、基盤が問われざるを得ない。ペスタロッチは、それをその生活、その全実存を以てなした。彼が人間教育の基盤を問うとき、それはキリスト教的基礎を問うことであった。何故か。キリスト教信仰に於て、即ちキリスト教に於ける唯一絶対の人格的な神との関係に於てのみ、人間は真に人間となるということを、彼は知っていたからである。彼は、自らの血と涙とを以て学びとった現実をロゴス化せんとしたのである。『隠者の夕暮』の中心問題は、すぐれて人間教育のキリスト教的基礎のそれである。われわれは近代に於ける人間教育全体の背景の中で、ペスタロッチの問題提起と、その解決への方向とを『隠者の夕暮』を中心に明らかにしようとしているのである。

一

近代は、人間が人間自らに就いての自信を回復した時代である。ヘーゲル流にいえば、中世の教権主義の下で人間が自己疎外 Selbstfremdung という状況にあったことに対する己自身を取り戻す運動、即ち人間主体性回復の動きが近代の特徴であるということが出来る。

さて、人間の問題が真に自覚的に取り上げられ、人間が自己形成的、他者形成的性格を本質としてもつことを、はじめて明確に理解したのはギリシャ人であったとされる。近代の人間発見も、先ずギリシャ復興 Renaissance という形で表面化して来た。が、ギリシャ復興は、一度中世を経た者にとっては真の人間復興ではあり得ない。何故なら、それはキリスト教との充分な対決を経たものではないからである。ルネサンスは、中世思

想が久しく罪の住家として呪っていた人間の肉体を自らの位置にもどし、人間 Human Nature の性能を肯定し、発揮することをその理想とした。文芸復興に於ける人間の発見は、何よりも先ず、「感性的人間」の再発見だったのである。この感性的人間の再発見を過渡的段階として、近代人は、彼等の最大の問題たる中世の教会的人間との対決に入り、宗教改革を通ることによって、真に近代的な自由市民的人間として自己を確立する。

宗教改革運動のなしたことは、人間の問題に関する根本的なものを含んでいる。宗教改革は中世的桎梏から人格 person を解放した。ここでの神は、中世教会の統制や組織から抜け出して、人格的自己の自由に基き、自己の体験に於て面接する人格的な力の神、意志の神であった。かかる神に応ずる者として、宗教改革的人間は、人格的、意志的、能動的な人間であり、人間形成に積極的に責任を果す人間である。このような責任的人格の発見は、すべての人間が神との関係に於て共通に附与されている尊厳を自覚しつつ、すべての人間を真の人間たらしめようとする民衆教育を強調させたのである。この面で、ルター、メランヒトンの果した役割は大きい。そして、この宗教的な人間解放が与えた人間への強烈な自信が、近代科学、近代哲学の母体なのである。

このように、近代の人間解放は宗教改革という形で真に具体的となったのであり、明らかにキリスト教的基礎をもつが、近代人はこのことを必ずしも自覚的に把握展開せず、結果として生じた人間の自信、自己肯定という遺産のみが以後の近代人の歩みを支配するの観を呈するに至る。即ち、近代科学、哲学が独自の人間観を打ち出しはじめるのである。それには、キリスト教諸派の対立抗争による自らの歴史的意義の自覚的理論的展開の空白という歴史的事情もある。かくて、宗教改革が市民社会での意志的道徳的人間の確立と自覚とを促進するという

役割を果したにも拘らず、この意志的人間は直接的に自己を肯定しはじめ、キリスト教は逆にそのような人間肯定に直接的に奉仕するか、あるいは時代進展より離反するPassivismの傾向をとる。それと共に、近代科学の実証主義Positivismと近代哲学の先駆としての啓蒙主義が大きく浮かびあがって来るのである。

が、啓蒙の旗印の下に、やがて哲学の世紀（十八世紀）が訪れたとき、そこに於て人間は如何なる姿で把握されたであろうか。ヴォルテール、ダランベール、ディドロ等がその名声を競い合う中で、肝心の人間はむしろ惨めな、何の尊厳をも持つことの出来ないものとなるという傾向を、われわれは見逃すわけにはゆかない。人間覚醒ではじまった近代は、その最盛期に臨んで早くも危機に瀕しはじめたのである。これら所謂哲学の徒達は、結局は自然主義者、自然を超えたものを認めようとしない実証主義者であり、唯物論者なのであった。彼等は人間の尊厳をどこに見出だそうとするのか。人間の姿は拡大された宇宙の中で見失われようとしているではないか。ルソーJ.J. Rousseau（1712-1778）が「私は人間に就いて語らなければならない」と宣して論陣を張った時、当時の先端を行く思想家達の間で、真の人間は見失われようとしていたのである。彼等はたしかに人間論者であり、人間批判者であった。が、人間の人間たる点、卑少なりといえども侵すことの出来ないその尊厳に就いては何ものをも教えない。彼等は実は人間が生きるということがどういうことかを知らない。まして、生きることを教えようとはしない。ルソーは人間の本来的な姿を凝視し、生きることの尊さを教え、亦、人をそのように生きさせようとした人である。近代の人間形成の思想はルソーにより確立したと見ることが出来るし、当時のヨーロッパ思想界に与えた彼の影響は殆ど計り知れないものがある。十八世紀より十九世紀への展開は彼の思想をめぐ

っているともいえよう。ペスタロッチもルソーから圧倒的な影響を受けたようであり、「ペスタロッチはルソー以外の教育書を研究しなかった」とさえいわれるのである。ペスタロッチの人間教育の理念を考えようとすれば、われわれはルソーのそれに触れないわけにはゆかないのである。

二

周知の如く、ルソーの『エミール』[5]は「創造主の手を出る時は凡てのものは善であるが、人間の手に移されると凡てのものが悪くなってしまう」という言葉ではじまっている。生まれながらの人間を、これ程大胆率直に肯定したものはない。が、これは彼が人間の原始的自然状態や動物的本能を讃えているのではない。彼のこのような生まれながらの人間の肯定は、人間の本来性として自由意志、道徳意志を認めるということと密接に結びついている。更には、根本的には彼の宗教性に根ざしているのである。「人間は自由なものとして生れた」[6]。

しからば、自由とは何であろうか。それは人間が「自分自身の主人となる」ことである。彼は、「自然人は自由の能力を持つ」という。が、ここでの自由は功利性の立場からのみ見られているものではなく、むしろ社会的自由、道徳的自由への移行を自らの課題として担っているような、そういう種類のものである。ルソーにとって、神の造った自然人はそういう自由に向う主体なのである。このような自由を社会的因習とか制度が拘束し圧殺しているという歴史的事実に直面して、ルソーは憤激したのである。ルソーは、新たに生まれた人間を不平等な社会から隔離してその自然の素質を真直ぐに伸ばしたならば、自然人であってしかも真の社会人たる人間を形成す

ることが出来ると信じた。自然状態に於て各個人は夫々主権者であるが、しかも自然権としての自由と平等を確保出来るような社会をつくるために、個々人は相互に自由な契約を結ぶに至る、と彼はいう。このように、彼は人間個々人の内奥に人間としてのよさがたくわえられて居り、それが正しく育てられるべきであることを大らかに認めるのである。人間を尊重するということ、このことをそれが圧倒されようとしている世界の只中で、ルソー程激しく人の心に訴えた人はいない。彼自身の生活は矛盾に満ちたものであり、多くの問題性を持つ。が、彼は自己の矛盾を糊塗するようなことをせず、矛盾の只中から己の現実を越えて真実こめて人間肯定の叫びをあげる。このような強烈な彼の人間肯定は、人間を真に「自己」たらしめる自由への絶対的信頼に基礎を置いているのであり、これは自由の持つ問題性を踏まえた上での彼の一つの信仰なのである。このような彼の自由への信頼は、最初に一言した如く彼の宗教性に根をもっている。[7] 人間は自由な存在である。しかも彼は同時に一つの「自然」に過ぎない。その意味で、彼は創造的な被造者である。かくて、自由は制約された自由であり、それは「導き手を要する」のである。人間が無制約的に自由であることが出来ると考えるのは全くの誤りであり、彼が聞くべき声を聞いてこれに従い、正しく応えるところにこそ自由は成立つ。かくて人間の自由は、根本的には選択応答を決意する自由であるといえよう。人は何者かに選ばれてあることによって、選び且つ応える。よく選び応えるところに人間の真の自由があるのであり、そこではじめて人間の「自己」が選ばれてあり、自己以外の何ものにも服していないのである。そのとき彼は、神の前に、そして人の前に毅然として立ち、応える存在なのである。ここに人間の高貴さ、尊厳さがある。ルソーが「義しい魂の高貴な独立」[8]というのは、このような人間の人

間たる所以のものを指摘しているのである。そしてかかる高貴な精神に生きる者こそ、真に人間を回復したものであり、このことは同時に尊厳の根源たる神の回復であった。

彼に於ては、義しい魂の尊厳と信仰の誠実さとは決して別ではない。彼は外面的伝統的宗教に対し激しい否定の言葉を吐いているが、これは信仰の本来の姿を回復せんとする彼の魂の表われなのである。彼は教会の権威よりも福音書の精神に従う一人の誠実なるプロテスタントたらんことを願っていた。彼は神自身と直接に対面する個的人格、そこにある個人の宗教的心情に対し絶対的信頼を置こうとしていたのである。神は人の心の奥底に向け溢るばかりの充実さを以て語りかけられる。人の魂はこれに感動し応答する。この応ずる声、内なる感情（良心）に人は耳を傾けるべきなのである。良心はいわば人間のこのような応答性であり、応答性への絶対信頼がルソーの人間信頼なのである。そして人はこの自由なる良心に対し、無限の責任が要求されているのである。「神は善を知るために理性を、善を選ぶために自由を、善を愛するために良心を与えた」[9]。ペスタロッチがルソーに共鳴心酔し、彼より測り知れない影響を受けたのは深くこの点に関していた。

人間の尊厳を人に自覚させると共に、人間が自らの責任に於て自他形成的に人間となるという近代の人間教育理念は、ルソーにより確立したといわれる。事実ルソーの人間自覚は、人間が人間であることを阻んでいるさまざまの障害を打破すべき強烈な人間教育の自覚であった。ルソーの人間教育の自己責任の強調は、かのカント I. Kant (1724-1804) に受け継がれ、一つの明確な理論的展開をみた。カントは人間の自己発展が自己克服であること、即ち理性の自然克服であるということを明らかにしたという点で、人間の自由形成的性格、自己責任を明

確化、或は深化したといえよう。が、ルソーの卓見である今一つの点、即ち人間性は自らの責任に於て形成されるべきものであり、それが自由であってここに何ものにも侵されない人間の尊厳があるのであるが、しかもこの人間の人間たる点が神への信仰の誠実さ、神への応答性と別でないということ、このことを一層純化明確化して、人間形成の福音的な把握と表現をしたのがペスタロッチなのである。

三

ペスタロッチは、ルソーがそうであったように、何よりも人間そのものを問いつつ人間教育を考え、これを生涯かけて追究した。彼も時代の子である。彼が人間の尊厳を人間本具の性内の事実であるとする近代思潮の影響下に立っていることを見逃すことは出来ない。彼の教育論も、一面に於てルソー、カントのそれと一致している。例えば、ペスタロッチは人間性 Menschentum の三大根本力 Urkraft として精神力 Geisteskraft、心情力 Herzenskraft、技術力 Kunstkraft、或いは精神的、道徳的、身体的な諸力を人間性内に見いだし、その中で道徳的宗教的なものの優越を認めつつ、しかも「調和」と「均衡」の原理の下に人間の全体的完成をはかるべきことを主張したが、[10] カントも人間性に於ける知的、意志的、感情的な力を解明し、その調和発達を教育の目的とした。しかも、彼は陶冶すべき中心が道徳的宗教的な力にあることを明らかにすると共に、真理、道徳、芸術等の最終根拠を人間性の自己意識のうちに見いだし、人間の人間たる点をその自己克服による自己実現にある、としたのである。このように、ペスタロッチの人間教育理念は一応人間の自己実現という近代的把握と共通の地

盤の上に立っているのであり、この点は『隠者の夕暮』考察に当っても最初に指摘されるのであるが、彼の場合はそれだけに止まっているのではない。ルソーの思想の内奥に暗示的に横たわっていた、人間の本質は神への誠実と別ではないという把握の仕方が、ペスタロッチに於ては前面にあらわれている。彼は明らかに人間教育を聖書的人間把握の立場から基礎づけようとしているのである。

ペスタロッチは、教育者であり、社会改革者であり、そして思想家であった。が、このような多岐に亘る彼の活動の全体を一貫して、彼には生きた人間に対する全人的ともいうべき関心があった。それは、究極的には彼のあの墓碑銘に „Alles für andere, für sich nichts.“ とあるように、人間の人間たることを追究し、しかも自己追求に於てではなく、むしろ他者追求、自己犠牲、即ち徹底した愛と信頼に生きることに於て人間の本姿を見いだし、それを自らに於て証したという、そういう性質の関心の持ち方であった。しかも、そのことが「人間とは何か」という真理探求の精神とかたく結合していたのである。

『隠者の夕暮』には人間学的思惟が中心にある。そして、この書に於けるペスタロッチの思惟の性格は、先に述べたように一応ルソー＝カント的なものであると見ることが出来る。彼によれば、「人間は彼を心の奥底に於て満足させる真理、彼の諸力を発展させ、彼の日々を慰め、彼の年々を幸福にする真理を求め」、「このような真理への道を彼の本性の奥底に見いだす」ような存在である。(11) 即ち、人間は自己教育に於て真理への道を向上する自己向上的存在なのである。そしてこのような人間の幸福に係わる真理を認識するのは「真理感覚」であり、(12) それは人間の奥底の感覚として「内的感覚」ともよばれる。(13) 近代の理想主義は真理あるいは権威というものを外から人

に運び込まれるものとして外に見いだそうとはせず、あくまで人間の内部に見いだそうとする。即ち、所与を認識主観が自己の光に照して自己自身の作為とするところに真理は成立するのであり、しかもこの自己自身の作為の最内奥の力はこの作為そのものの本質あるいは中心点なのである。ペスタロッチは明らかにこのような理想主義的思惟の影響下に叙述をすすめていると見ることが出来る。そしてペスタロッチの能動的、積極的な人間把握の背後には、抵抗を排して体当りで人間解放を絶叫するルソー的気魄と、人間実現のために自然を征服せんとするカント的気骨の裏づけがあることを感ずるのである。

しかしながら、彼に於て注目すべきことは、人間を個人的にではなく関係として把えていることである。即ち、彼は人間を人間（理性）対自然に於てに止まらず、人間対人間に於て把握しているのである。否、彼に於ては、人間が内なる可能性をのばすということが、単なる自己の向上に止まらない意味を持っている。それは人間的 inter-subjective な人間を実現するということである。人間の本質、それは孤立した自我ではなく、「対我」Gegenich、即ち「汝」Du との関係である。そして、この本質は関係に於て陶冶されるのである。[14] 人間は本来関係的存在である。だから、この関係に於ける陶冶 Bildung の道が「自然の道」といわれるのである。[15]

しからば、彼は何を、如何に陶冶すべきであると考えたか。先ず陶冶の一般目的としては、人間性の内的な諸力の向上が目指されている。とりわけ、「単純、無邪気というような純粋な感じ、これこそ陶冶する人間の第一の主題である」。[16] 純粋な「人間らしさ」、[17] あるいは「真実の人間の知慧」[18] に向けて人間は陶冶されねばならないのである。彼のいう人間らしさに生きること、これは人間が人間としてそのあるべきところにあることであり、こ

れこそ「内心の安らぎ」、「この世の浄福 Segen」である。次に、彼はこのような人間らしさへの陶冶が人間関係によってなされるといっている。[19] このことは、人間らしさ、心の安らぎ、浄福が単に個人の自己修練によってではなく、愛の切磋琢磨によって得られるものであることを意味している。単純とか無邪気という心根は、率直に受け入れる柔軟な心、素直に他者を認める心の構えである。これを彼はまた子心 Kindersinn といっている。「人間は先ず子供である」。[20] 子は親をみとめることに於てはじめて生きる。このように人は他者をみとめることによって立つのである。彼が人間陶冶の場として最も近い人間関係たる家庭を重視するのは、[21] 人間の人間たることを親心に対する子心にあるとするからである。子は親の愛に応じて生きるのであり、人間の本質が子心にあるとは、他者への応答性に於てあるということに他ならないのである。彼は「子心と従順こそが人間陶冶の早期のそして最初の基である」といっている。[22] この単純、無邪気、内心の安らぎ、即ち人間らしさ、これは人間本性のうちに秘められて居り、すべてを清める力であって、自然的な人間関係、即ち愛と信頼の関係の中で育てられるとする彼の説は、明らかに個人主義的自己形成の思想と類を異にしている。人間の内的な本質はたしかに目覚めさせられ発展させられるべきである。が、それはその人一人のためにではなく、真に他者への応答性に於て生きるためである。人間は自分のためにのみ生きているのではない。だからこそ、これは人間関係に於て陶冶啓発されるのである。人間性は、彼に於ては、究極的には関係概念であるといってよいであろう。

ペスタロッチの、以上のような陶冶理念の把握は卓見である。しかし、ペスタロッチの真にペスタロッチたる所以は、この人間らしさ、即ち人間の応答性 Verantwortlichkeit と、それを陶冶する場たる人間関係との窮

極の基礎を明らかに神との関係に置いていることである。彼に於ては、神に対する信仰が総ての人間的なことの源泉である。真の安らぎは父なる神への信仰に於て揺ぎないものとなるのであり、間柄に対する謙遜で素直な心は神に対する人類の子心以外の何ものでもない。神への信仰こそは、「人間の本性の最も高い関係に於ける人間感情の基調」なのである。(23)

彼は人間が関係的存在であることを追究して行って、神との間の父子の関係に、即ち神の親心 Vatersinn に対する人の子心に人間の最も深い関係を見いだした。家庭の親心、子心も、国家に於けるそれも、いわば神に対する信仰の結果である。或は家庭をはじめとする人倫共同体に於ける清純な人間関係は、神の親心を人に知らせ、人の子心をはぐくみ育てる場として、神よりの賜物 Gabe であるといえよう。これに応じて、人間が人間らしさ(子心)に生きることは神よりの責務 Aufgabe なのである。あらゆる人倫の喪失は子心の喪失であり、罪とは究極的には神への信仰(子心)の喪失、反抗である。(24)

われわれはここで、このようなペスタロッチに於ける神との関わりと人間の内的発展との関連性の問題をもっと突込んで考察し、ペスタロッチの人間教育理念の特色を明らかに浮び上らせなければならない。

先に述べたように、ペスタロッチは心情 Herz の教育を人間教育の中心に置いた。教育活動の目的は、彼によると、意識の発展にあるが、心情に於ける意識の本質は愛 Liebe、信頼 Vertrauen、感謝 Danke、従順 Gehorsam の感情である。では、かかる感情は如何にして人の魂のうちに芽生えて来るのであろうか。彼は、かかる感情を主として幼き子とその母との間に起きる関係から生じてくるとする。「母はその本性から子供をはぐくみ護

り、喜ばせずにはいられない。」母の愛を通じて愛、信頼、感謝、従順の芽生が子供の心のうちに成長する。かくて芽生えた愛と信頼の心は次第に広まり、やがて「子供は母ではなくて、母に似たものを善と感じ、それを愛し、自分の母の姿に微笑んだ彼は今や人間の姿に微笑む。」そして「このような感情の芽生の中にこそ人間の本質を創造された主に対する人類の帰依に特有な心情の感情的芽生の本質がすべて宿っている」のである。彼の魂のうちに成長して来た愛、感謝、従順の感情が拡張展開して神を父とし母として信従するに至るのであり、今まで身近な母を信じ、母のために正しく行為して来たように、今度は神の為、人の為に正しく行為するのである。(25)このようにして、道徳と宗教の基礎教育は、主として母と子の自然的な人倫関係に於て行われる。母との関係に於てはぐくまれる意識は、その本質に於て神との関係の意識なのである。

われわれはここで個人の内的発展と、その発展の場としての人間関係が、神に対する信仰へ通ずる道としてこの間が連続的に把えられているということを、一応認めなければならないであろう。が、ここで人間の内的成長として連続的にみられている神への信仰は、厳密には宗教的心情乃至は宗教的意識のことである。愛と信頼の宗教的心情の涵養が、人間の陶冶に於て最も重視されているのである。このような心情或は意識の涵養が人間の手に委ねられている最高のことであることを、ペスタロッチは知っていたのである。「母は神の代理である」。彼は信仰が人間の内に根拠をもち、人間自身の手によってはぐくみ育てることが出来ると主張しているわけではない。信仰とは、人間存在の内容と意味を神の愛の中にもつということの実存的承認であり、このこと自体が神に根源をもつのである。彼の考え方を貫ぬいている人間肯定、人間の自己形成への信頼は、不抜の基盤、即ち神の

絶対的肯定の上に立っている。彼の人間肯定は人間の自己肯定ではなく、絶対他者たる神の側からする肯定である。人間は教育的存在であるといわれるが、教育の真の主体は父としての神なのである。[26] そして「人が子心を失ったということが、神の教育を不可能にしている」のである。この失われた子心の回復は、人間の力の外にある。このことを為し給うたのは、「失われゆく神の子の種族に対する父なる神の啓示、神と人との仲保者」、苦しみと死をもって人類の救済者となったキリストに他ならない。[27] かくて、キリストの十字架に支えられて教育そのものが可能になって来るのである。人間肯定は究極的には神の愛に応える人間の責任を自覚することであり、人間関係の肯定は、それがいわば神と人との愛と信頼の呼応関係を真に知り、そしてこの愛を証しするために神より与えられた恩恵の場であることを自覚することである。彼の人間教育は、人間らしさを人間関係に於て陶冶することに他ならないが、この人間らしさも人間関係も、いずれも神との関わりに根源をもっているのである。そしてその内容は愛と信頼である。彼に於ては、教育は愛の教育であり、愛のための教育であった。以上にみてきたように、彼は聖書的人間把握に基礎を置いて人間の内的成長としての教育の意義を積極的に認めたのであり、この点で劃期的な仕事をしたといってよいであろう。

ところで、『隠者の夕暮』に於けるペスタロッチの主要概念の中で問題となるものの一つは、人の親心 Vatersinn ということである。この書での強調概念はむしろ人の子心 Kindersinn である。そこで、人の親心と子心とは如何なる関係にあるのかが問題になるのである。彼に於ては、最も本質的な意味で親心の主体は神であり、人は子心の主体であった。子心を養い育てるのは親心であり、その意味で親心ははぐくみ育てる心、いわば教育

的心情としての愛である。そして、親心あるいは教育愛の真の源泉は神である。「神は人類の父である」からである。親心は清純な子にしてはじめてわかる。失われた人の子心は神の無比の親心――キリストの十字架――によって回復され、神の親心の呼びかけに全実存を以て応えるべくかり立てられるのである。この応答ということは、単に従うということではない。「愛と知慧と親心」である「神の光」にてらし出されて[28]、彼自身が愛と知慧と親心とに生かされるのである。親心に生かされるということは、子心を育てるべく働かされることを意味する。神への信仰は教育的自覚を人におこさせるのである。だから、彼は人の親心も子心も共に「神に対する信仰の結果である」というのである[29]。しかし、人の親も神の子である。子心に徹する時、彼は生まれながらの親心を一度否定させられる筈である。神の前には親も子もない。しかも、神の前に人の親心がもう一度意味を持つとすれば、それは神によって新たに意味が与えられるからである。人の親心は神の親心の証し、神の愛の影像である。親であることは、彼が子たちを浄福の悦楽にいたらせ、「正義を実行し自由を愛するだけの気高さのある」力に生きる責務を神に対して負うことであるが[30]、凡ての浄福、力の源泉は神にあるから、彼は父なる神の愛の器なのである。ペスタロッチの逞しい人間肯定を見よ。神に対する信仰に於て、人間はこの地上に毅然として立つ。

ペスタロッチに於ては人間が自己を超脱する絶対的境地が明示されて居らず、この点徹底味を欠くと評する人がある[31]。宗教的自覚ということだけがこの書の主題であるならば、確かにそうもいえるであろう。『隠者の夕暮』の中でわれわれは人間の罪性についての突込み方が稍々欠けているという感をいだく。従って、全体として理想主義的な匂いがすることを否むことは出来ない。その意味で、近代主義の問題点、即ち信仰について語りつつ結

局は人間を直接に肯定しているのではないかという疑問が、彼に於てもつきまとっている。が、われわれはこの書が最初から神学的関心で貫ぬかれているわけではないことに気を付けなければならない。彼の関心は「人間」であった。人間に生まれ、人間として生き貫く。彼にとってはそれが問題なのである。彼は人間学的思惟で人間教育を追究したのであって、それ以上ではなかった。しかも彼の追究した人間の真相は、神との関係に於て、否むしろ神の側からみるときにはじめて現わとなるのであり、その時人間は人間であることを、彼は見いだし、この現実を人間学的思惟に於て叙述したのである。彼は人間教育を追究し、その聖書信仰的基礎につきあたったのである。彼の立場は、その意味で一種のヒューマニズムのそれであるが、しかしそれはキリスト教ヒューマニズムとよぶことが出来るものである。

四

われわれは、ペスタロッチの初期の作『隠者の夕暮』を中心として、彼の人間教育の理念を考察して来た。彼の晩年の円熟した教育理念を最もよく、しかも簡潔にあらわしていると見られるグリーヴスにあてた『幼児教育の書簡』[32]を見るときに、われわれは、彼がここで明らかにされた理念をその生涯を賭けて追究し確認した人であることを知ることが出来る。『幼児教育の書簡』では、人間教育のキリスト教的基礎が彼の永年の思索と体験を経ることにより一層の明哲さを以てとりあげられているのである。われわれは『隠者の夕暮』の理解をより確かなものとするために、この書簡の思想に簡単に触れなければならない。

「子供は人間性の凡ての能力を神から与えられている」が、それらはいわば「まだ開いていない芽のようなものである。その芽が開くと各々の葉は開いて開かない葉は一枚も残らない。教育の過程はこのようなものでなければならない」。そしてこのような「子供の内的成長に於て、母には創造主自身によって重大な役割を演ずべき資格が与えられている」。「我が子の幸福に対する熱烈な希望ははやくから彼女の心臓のうちに植えつけられている」。子供に対して「母性愛より以上に影響の強く、多くの刺激を与える如何なる力もこの世にはない」。然り、「神は母に対してその仕事に必要な能力を与えている」から、母はその子供を教育すべき資格を具えているのである。が、この母の愛の下ではぐくみ育てられる「この心臓 Herz、この頭脳 Kopf、この手 Hand」は、一体「何人への奉仕に捧げられなければならないのか」。教育の究極目的は何であろうか。その答は神が与えている。即ち、神自身が汝の子供の本性のうちにその目指す方向を既に与えているのである。「神は良心の声を子供のうちに植え付けた」。しかもそれだけではなく「神はそれ以上のことをしている」。良心は、神そして人が限りない愛に於て呼びかける声に応ずる、いわば人格的応答性とでもいうべきものであるが、「神はこの声に耳を傾けるべき能力を彼に与えているのである。神は子供に対して自づと天に向う目を与えた」。「かくて汝の子供は地のためにではなくて、実に天のために創造されたのである」。そしてそこに至る道を神の恩寵が汝の子供に啓示している。「汝の職分は、汝の子が神により差し出されている天からの梯子をよじ登るように子供の一切の能力を結合させ喚起させることである」。「信仰と愛、それは神の導きの下にわれわれの天性を定められた最高の祝福に与からしめる二つの素質である。しかもこれは最初からそれが充分に成長した場合の最も成功した努力にも決して劣

らない力と強さを示している」。即ちこれは全き神の賜物なのである。母性愛はたしかに教育に於ける第一の原動力である。しかし「それは人間的感情のうちで最も純なものであるとはいえ、なお人間的なものである」。救いは人間の力によるのではなくて、神の力による。「母親は自分の力とその最善の意図によってその子供の心臓と頭脳と手とを地上の滅び易い事物以上に高めることが出来ると想像してはならない」。神からの助けが凡てを可能にする。神の愛が母を通してはたらくときに、子の心はすくすくと育つのである。そしてこのような神の愛の下で育った子供の愛と信頼は、究極的には救い主である神への愛と信頼に外ならない。母に対する子の愛と信頼は、「人間を謙遜させることによって真に人間を向上させるところの最も純なる感情、神への信仰の単なる前徴」なのである。

以上のような所論は、人 Man が真に人間 Human となるのは神の愛に、そして人との愛の交わりに生きることによってであるということを家庭教育という場に於て明らかにしたものである。『隠者の夕暮』をその底で支えていた聖書的人間把握が、ここでは一層徹底して表現されているといってよいであろう。

むすび

人間は本質的に自他形成的性格をもち、その意味で教育的存在であるということを最初に明らかにしたのはソクラテスであった。近代の人間教育の思想も何らかの意味でソクラテス的原理の近代化であるということが出来よう。そこでは、教育は人間性の内なる先験的可能性（可能的自己）を有機的調和的に発達展開させることであ

った。従って、教育は本質的には人間の自己展開であり、人間の人間たる点、その尊厳は結局「自己」に根拠をもっていたのである。しかし、人間の「自己」肯定の問題性は歴史が証明している。人間の自己主張は自己疎外を結果して来た。その土台の上に立つ人間形成は、結局は資質豊かな少数の選良の「自己」覚醒であり、真の人間解放となることが出来なかった。「玉座の上にあっても木の葉の屋根の蔭に住まっても同じ人間」である、その人間の尊厳の正しい回復と、真の人間教育への覚醒が、かくて歴史の中での人間的課題となるのである。キリスト教的人間把握はこの課題への一つの解答をもって登場して来たのであるが、それがキリスト教的人間形成理念として明確にうち出されたのは、近代に入ってのペスタロッチに於てだったのである。彼は人間の「自己」を人間の内なるあるもの something として自己中心的に把握せずに、神との関係に根拠を置き、神に召し出される「自己」として理解した。従って、人間の人間たる点は人格的応答性にあるとしたのである。ここでの人間肯定は、人間の自己肯定ではなく、神の側からする肯定である。人間の尊厳は神に等しく呼び出されていることにあるのであって、人間の資質というようなものとは関わりがない。そして尊厳の実現は神の召しに応ずるか否かという彼自身の責任にかかっているのである。人間が人間であることは神に根拠をもつが、それは固定的状態なのではなく、常に真に人間であるように呼び出されていることである。この応答性の内容は愛であり、信頼である。それは神が愛であるからである。愛に生きることに於て、人は真に人間なのである。彼の人間教育は、以上述べたような人間に課せられた責任に関していたのである。そして人間の内的諸能力の育成ということも、このような人間教育の土台の上で、新しく位置づけられ積極的に肯定されたのである。われわれはこのようなキリスト教

的根拠よりする人間形成としての教育の理解把握を彼の『隠者の夕暮』を中心として見て来たのである。キリスト教の人間理解は、実存的性格を持っている。ペスタロッチの人間教育理念も、決して単なるイデーではなく、彼の全実存が証している事柄 Sache である。既に述べたように、彼は人間の罪性ということをそれ程はっきりは指摘していない。人間文化の罪性がそれ程切実な現実問題としては展開しなかった近代の歴史的実存として、彼の論ずるところの限界もこの点にある。現代では人間の問題性がのっぴきならない形で露呈して来ている。したがって、教育に関し彼の問題としなかったことで、現代のわれわれの問題としなければならないことも多々ある。が、しかし、人間が本質的に自他形成的存在であることを止めない限り、聖書的基盤に立って自己疎外を打ち破る新しい人間教育の道を明らかにしたペスタロッチの教育理解は、彼の人間そのものと共に、人間の歴史の中で常に輝かしい位置を占めて行くことであろう。

註 (1) Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780. この書は Isaak Iselin というペスタロッチの親友が編集していた Ephemeriden der Menschheit 誌の一七八〇年五月号に、彼が匿名で寄稿したものである。この書の本論文に於ける引用は、便宜上 Friedrich Mann がそのペスタロッチ選集に於て附した節番号を用いた。訳文は、一部を除いて長田新訳（岩波文庫版）を借用した。ペスタロッチその人については、H. Morf, zur Biographie Pestalozzis, I. 1865², II., III. 1885, IV. 1889; Reger de Guimps, Histoire de J. H. Pestalozzi, sa vie et sa pensée, 1874. の二名著を参照されたい。いずれも優れた邦訳がある。彼の人間形成の理念に関しては Otto Müller, Pestalozzis Idee der Menschenbildung, 1949² という好著がある。

(2) 『隠者の夕暮』以前にも、彼が「愛国団」の機関新聞である『警醒者』Der Erinnern に一七六五年に寄稿した『希望』Wünsche 及び『アギス』Agis という二文があるが、実質的には『隠者の夕暮』を第一作と見ることが出来る。

(3) 拙稿、『プラトンのエロス――その教育的意義についての一考察』、倫理学年報第三集、昭二九所載、及び『エロスよりアガペへ――キリスト教教育原理研究への一つの序説』、ＩＣＵ(国際基督教大学) 教育研究第一号、昭三〇所載参照。

(4) この点に関して Emile Brunner はその著 Chiristianity and Civilisation II, London, 1949, pp. 47 ff. に於て優れた見解を示している。

(5) J. J. Rousseau, Emile, 1762. 平林初之輔訳（岩波文庫版）がある。ルソーに関しては、京都大学人文科学研究所報告『ルソー研究』一九五一を参照されたい。

(6) Contrat Social, 1762. 『社会契約論』邦訳（岩波文庫版）一五頁。以下のルソーの思想内容は、主として『エミール』『社会契約論』にあらわれたものである。

(7) ルソーの宗教思想に関しては、前掲京大人文科学研究所の『ルソー研究』中の森口美都男『ルソーの倫理・宗教思想』に適切な見解が示されている。

(8) La Nouvelle Héloïse, 1761, Nouvelle édition par D. Mornet III, 261.

(9) 『エミール』邦訳五三八頁。

(10) このような主張は、例えば彼の著『リーンハルトとゲルトルード』Lienhard und Gertrud, 1781-1787. の随所に見られる。

(11) Die Abendstunde eines Einsiedlers, (5), (6).

(12) Ibid. (12).

(13) Ibid. (95).

(14) Ibid. (55).

(15) Ibid. (7) etc.

(16) Ibid. (46), (47).

(17) Ibid. (49), (50).
(18) Ibid. (43).
(19) Ibid. (55).
(20) Ibid. (64).
(21) Ibid. (56).
(22) Ibid. (59).
(23) Ibid. (76), (77).
(24) Ibid. (144) etc.
(25) 以上のような見方は、彼の『ゲルトルードは如何にしてその子を教えるか』Wie Gertrud ihre Kinder Lehrt, 1801. の終りの二信に比較的明瞭に見ることが出来る。
(26) Die Abendstunde eines Einsiedlers, (118).
(27) Ibid. (189).
(28) Ibid. (180).
(29) Ibid. (105), (106).
(30) Ibid. (170), (186).
(31) 例えば福島政雄『ペスタロッチ』一九五六、一八八頁以下にこのような主張がみられる。
(32) Letters on early education, London, 1827. J. P. Greaves (1777-1842) に宛てたと見られているこの一群の書簡は、その独乙語原文を今日発見出来ないものであるが、ペスタロッチのものとして信ずべきものであるとされている。玉川学園版、ペスタロッチ全集第五巻に皇至道氏の邦訳がある。